

『八木の里ぐるみ』で育む自立の力 ～道との融合の中で、『晴れの舞台』～ 八木南小学校 千葉日報教育進大賞

子どもや若者への優れた「自立支援教育活動」を顕彰する千葉日報社の「2010千葉教育大賞」に、団体・個人から22件の論文の応募がありました。一次選考で選ばれたのは9件でした。12月28日に、公開プレゼンテーション審査が行われ、八木南小学校が、見事「準大賞」を受賞しました。

八木南小学校は、平成22年度、流山市の指定を受け、地域連携推進校として、「学校・家庭・地域が共に歩み、児童を自立させる」教育を目指しています。全校児童数166名という小集団の生活に慣れていることから、大舞台での自己表現する力を培いたいと考え、子ども達が、自信を持って自分の言葉で感想や意見を述べ、様々な表現活動を行う『晴れの舞台』を学校と地域で多く設けるように意図してきました。

表現力を支える基礎学力育成として、3年生対象にボランティアの方々と実施している「放課後にここに算数教室」、大学との連携

の「本による調べ学習」、12年間続いている「音読活動」等と共に、地域との連携で多角的な体験活動を行っています。米作り、読み聞かせ、お年寄りの交流、案山子作り、壁アート、読み聞かせ等、6カ年の教育課程に無理なく位置づけています。子どもを中心に置き、保護者・地域・学校職員が日々、会話を重ね、自立の力を育てている実践が大きく評価されました。



小さな森のある学校 東小学校

東小学校の西側には、「かがやきの森」と命名された林が隣接しています。それまで人が立ち入ることさえ困難であった林を保護者や地域の方々、NPOなど多くの人々の手によって学習環境の場としてつくられた林です。

落葉樹を中心とした雑木林で、寒い季節は、落ち葉が降り積もり、歩くときの裏から弾力のある柔らかな感触が伝わってきます。

「かがやきの森」の入り口には手作りの大型案内板があり、児童にとって憩いの場としてだけでなく、四季の自然探索や森の写生会など様々な学習の場として親しまれています。

学力の基礎となる言葉の力を

～もっと広げられ、音読の輪～

今年度、中学校版『音読な が れ や ま』が市内の全中学生に配布されました。1月の「活用アンケート」によると小学校では配布5年目ということで「音読タイム」の設定、学年集会や全校集会、「校内音読発表会」での活用など様々な形で活用が広がっていることがわかりました。1年目の中学校でも国語の時間の活用から、朝学習や「音読カード」での取り組みへと徐々に広がっています。

成果としては、小学校では、声を出すことへの抵抗がなくなり、大きな声での挨拶や積極的な発表や話し合いができるようになった。読書への興味が高まり、古典に親しむようになった。表現する楽しさを実感している。言葉が増え、話す力や聞く力、表現力が育った。コミュニケーション力がつき人間関係が良くなったことなどが挙げられています。

中学校でも音読が好きになり、文章に対する愛着を持つようになったなど成果に結びついています。

12月4日には「音読・朗読発表会」が実施され、市内の小学校7校、中学校3校、合計189名の児童生徒が、約600名の観客を前にして、練習の成果を思う存分発揮しました。

小中9年間を通して音読に親しもうと、新川小学校と北部中学校のコラボレーション発表も新たに見られました。今後も流山に音読の輪が広がればと思います。



国際人としてのアイデンティティー

～外国の言語文化に親しむ～

次年度から小学5・6年を対象に正式に始まる「外国語活動」の授業。市内の小学校では早くから、「国際理解教育」の一環として取り組まれてきました。今年度、英語活動指導員スーパーバイザーのキャサリン先生・スキップ先生は、市内の各小学校を年間12～14日間訪問し、外国語活動の授業のお手伝いを続けてきました。英語を使って様々な活動を行う二人の授業は、子どもたちからも大人気。授業が終わってからも握手を求める子どもたちで鈴なりのキャサリン先生。放課後の校庭で遊ぶ子どもたちに囲まれ、満面笑みの握手やハイタッチで応えるスキップ先生。二人の存在は子どもたちにとって、英語そのものであり、外国文化への扉でもあります。

子どもたちを励ます英語活動指導員の先生方



市内全小学校に配置されている英語活動指導員の先生方は、長年海外で生活されていたり、英語指導に携わってこられた英語の達人ばかり。ある教室をのぞいてみました。

和気あいあいと外国語活動を進める子どもたちの声に混じって、指導員の先生の子どもたちを励ます英語が、教室全体に心地よく響きます。「Great!」「Wonderful!」「Very Good!」「Perfect!」などなど。その瞬間、子どもたちの表情がぱっと輝き、次の活動へのさらなる意欲付けにつながっていくのが見て取れます。子どもたちをやる気にさせる指導員の先生方は英語の達人であるばかりでなく、子どもたちの笑顔を引き出す名人でもあります。

大好評の3名のALT

市内の8つの中学校には現在、ギル先生、ラリー先生、ベンジャミン先生という3名のALT (Assistant Language Teacher) が、学校規模に応じて年間40～88日間派遣されています。個性豊かで、大変ユニークな3名の先生方は、何よりも子どもたちとのふれあい大好き。英語の授業はもちろんのこと、日常生活や行事でも子どもたちの中に入り、積極的に参加しています。

小中一貫教育を目指して

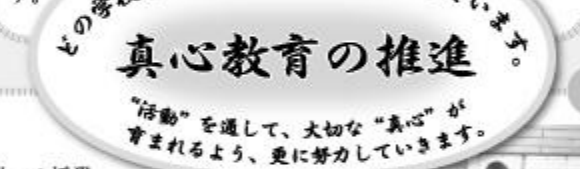
流山市では、中学校と小学校の教員で授業交流を行ったりと、児童・生徒の合同部活動、あいさつ運動を行ったりと、小中学校の連携を図ってきました。



更にこれを進め、義務教育9年間にわたる、連続性を生かした取り組みを目指しています。それぞれの学校の特色を生かしながら、中学校区での学校の実態や特色に合わせた教職員の連携、児童生徒の交流、地域と共に歩む協働の取り組みを今後進めていきます。

幼保小の連携を目指して

幼保小の連携も進んでいます。今年度も、「幼稚園・保育所(園)から小学校へなめらかに移行するにはどうすればよいか」をテーマに教職員の交流、講演会、相互理解を深めるための見学会が計画実施されました。幼稚園・保育所(園)と小学校の子どもたち同士の交流も行われています。



真心教育の推進

“活動”を通して、大切な“真心”が育まれるよう、更に努力していきます。

理科好きな子どもを育てよう

関係機関との連携による取り組みが多く見られます。科学技術振興機構(JST)の支援を受けて、近隣の大学から研究者を招いて、授業を行っている中学校もあります。科学館・大学等と連携して計画を練り、授業に生かしている学校もありました。いずれの取り組みも、綿密な下準備と、学校全体の協力体制があって実現する先進的な企画です。中学校の「理科部」の生徒や、卒業生が様々な科学フェスティバルでボランティアとして活動している姿もみられました。



児童生徒ばかりでなく先生方の理科実技「理科好きな子どもを育てる研修会」も昨年に引き続き、実施されました。今回は市役所のみどりの課と共同で千葉大学園芸部の先生にご指導を受けました。顕微鏡の使い方、実験に適した材料の選び方など、各学校の実践に生かせる内容でした。

日本人としてのアイデンティティー

～伝統文化に親しむ～

君がため 春の野にいでて 若菜摘む
わが衣手に 雪は降りつつ



市内のほとんどの中学校では、「百人一首大会」を実施しています。国語の授業で扱ったり、学年の委員会で運営したりと取り組み方は様々ですが、日本の伝統文化にふれる1月の恒例行事として定着しています。東深井中学校の1年生は、武道場の床に敷いた畳に札を並べグループ対抗で行っていました。上の句が読みあげられると、すかさず下の句に手が伸びるなど、お互いの腕前を競っていました。



小学校では落語を鑑賞している学校が多くあります。体育館に設置した高座で語るのには本職の落語家です。落語特有の語り口を子ども達にわかりやすく伝えていました。租税教室に落語を取り入れて学ぶ取り組みもありました。また、長崎小ではNPO法人「鶴亀座」の方々による能楽体験を実施しました。「鱈ヶ崎おびしゃ行事」の祭りには、雷神社で行う行事の前に鱈ヶ崎小に七福神が出向きました。七福神が子どもたちの質問に答える特別授業が実施され、子どもたちが地域の伝統文化にふれる機会となりました。

